

# 空からオタマジャクシ

## —メディアリテラシーの授業実践—

横浜市立南高等学校教諭  
山崎 旬一

### 1. はじめに

情報の信頼性を指導する際、生徒を納得させる実例が欲しいと思う。著名人の名前を検索させ、いかに間違えが多いか、などと指摘しても生徒の関心がある著名人でなければ「ふうん」で終わってしまう。

刺激的で、真実と思われる状況で、事実の確認作業をさせることで、分析的に情報の信頼性に到達できる話題は無いかを探していた。

2009年6月11日の読売新聞に「空からオタマジャクシ」と題した記事が載った。さらに12日には「オタマジャクシ落下の謎」、16日には「オタマ広島も降った」と続報が続いた。内容はタイトル通り、オタマジャクシが車の上や路上で見つかったという話で、怪奇現象と呼ばれる話の1つだ。空から降るはずのない物が落ちてくるという現象は、その手の本には必ずといってよいほど登場する。その話が大手新聞に掲載されたところが教材として大変有効だと感じた。さらに同じ話が朝日新聞などの他紙も扱っており、その内容がほとんど同一だということも有効な側面だ。

### 2. 指導の流れ

学年最後の授業として、2時間を確保した。事前に、新聞のコピー、新聞社のWEBページで該当の記事を扱ったサイトのURL(次年度の授業では、PDFにして保存した物を見せた)、他社の同様の内容のWEBページ、怪奇現象を扱った本のコピーを用意した。

#### (1) 事実と真実

実際の授業のやりとりを記す。

黒板に「事実」「真実」と書き、どこが違うのだろうかと聞いた。生徒は首をひねっている。そこで、反対の意味を持つ言葉を考えてみようと言う。何人かの生徒が「事実」の反対は「うそ」と答える。では「真実」の反対はと聞くと、それも「うそ」と、あやふやな解

答だ。では、「うそ」ってどういうことと重ねて聞くと「本当ではないこと」。なるほど。では、「うそ」を言った人は本当のことを知らないの、知っているの。知っていると答える生徒が多い。じゃあ、本当のことを知らないで違ったことを言う場合があるよね、これは何と言うの。

国語の授業のようになってきたので、「虚偽」ってどういうこと。正しいことを知っているのに違ったことを言うことだよ。[真実]の反対は「虚偽」ではないですか。先ほどの話の流れで言えば、これが「うそ」ですね。では「虚構」ってどういうことですか。本人が意識的か無意識的かは別にして、違うことを作り上げること、あったかのように言うことではないですか。先ほどの、本当のことを知らないで違ったことを言う場合は真実を言っているのですね。

「事実」の反対は「虚構」、もともとそのようなことがなかったこと。「真実」の反対は「虚偽」、知っ

ていることを正しく伝えないこと。黒板には以下のように記す。

事実	⇔	虚構
真実	⇔	虚偽

事実は1つ、真実は伝える人の数だけあるとよく言われます。真実には情報伝達が関連するということです。では、今の話をふまえて、資料を読んで下さい、と資料を配る。

#### (2) 本を読ませる

同様の現象が記述されている、怪奇現象と呼ばれる内容を集めた本を読ませる。生徒は、怪訝な顔をするが黙って読み始める。何人かが「先生これ本当のこと？」とつぶやく。生徒が読み終わった頃で、本を見せタイトルや目次を読む。

#### (3) 真実、事実

書かれていることは真実ですか、事実ですかと聞く。「虚構」と答える生徒が何人か現れる。なぜ、そう考えたのですかと聞くと、この本はこういった不

思議な話が無いと売れない、おもしろい話を載せないと本が売れない、「事実」であることの必要は無い、「虚構」ではないかと疑って読む本だ、といった答えが返ってきた。一部の生徒は「事実」かどうか分からないが、「真実」ではないか、うそがばれたらかえって売れなくなる、「真実」だから怖いのだ、などと解答した。

#### (4) 新聞を読ませる

次に、読売新聞の記事です、と言ってコピーを配る。先ほどの本と同じ内容です。では、「事実」ですか、「真実」ですかと質問する。先ほどより多くの生徒が「真実」だと答える。なぜと聞くと、新聞社が「虚偽」を書く必要がない、「虚偽」を書いてもメリットがない、写真がある、インタビューした人がいる、と答える。「事実」ですか「虚構」ですかと聞くと、答えは半々に分かれた。



図1 オタマジヤクシ

#### (5) WEB ページの確認

同様の記事が掲載されている他社のWEB ページを閲覧させる。2, 3社のページを読み終わった頃を見計らって、先ほどと同じ質問をする。記事は真実を伝えていますが、書かれていることは事実ですか。真実と答える生徒は先ほどより多い、事実かどうかの判断はほぼ半々で先ほどと変わらない。なぜ真実と考えたのですか、と聞くと複数のサイトに同様のことが書かれているからと期待通りの解答だ。

#### (6) どこまでが事実

ワークシートを配り記入させて回収後、いくつかを取り出して読み、まとめにつなげた。

ワークシートの内容は、次のようなものだ。

ア 時系列に事象を整理し以下の質問に答えよ。

発見者は何を見た、何を見ていない

記者は何を見た、何を見ていない

イ 記事のタイトルが「空から…」 「…落下の謎」 「…降った」となっている理由は何か。

ウ 図書と新聞を読み比べたとき、印象が異なった理由は何か。

#### (7) まとめ

情報の真偽を判断することは難しい面があるが、発信者の評価、他の情報との比較、自分の知識、情報を分析的に読むことを通して考える必要がある。

### 3. 情報の信頼性

私たちは、受け取った情報の信頼性を評価しなさいと指導する。このとき信頼性という言葉の2つの意味、真実と虚偽、事実と虚構を意識しながら指導することで評価の手段が明確になると思っている。カエルが空から降ってきたという記事は真実である。情報の発信元が信頼できる新聞社であること、他紙にも同様な記事が掲載されていることから判断した。では事実は何かということ、難しい話になる。オタマジヤクシやカエルがあるべき場所ではない所に落ちていたことは事実だろう。でも空から落ちてきたことは誰も確認していない。空から落ちてきたは推論であり、全く別の解釈があるのかもしれない。従ってこれは事実とは言えない、つまり推論だ。

最初の怪奇現象本の記事は真実を疑った。なぜなら情報の発信者が真実を語る必要が無いからだ。この例のように、情報の発信者が誰かを調べることで情報の信頼性を推し量ることは大切なことだ。

入手した情報を懐疑的に扱う必要があること、信頼性の判断は発信者を考えること。常識は大切だが、絶対ではないこと、分析的に扱うことが重要なことを感じさせたい為の授業だった。

### 4. 言い訳

私は国語の教師ではない。メディアリテラシーにつながる内容を扱った背景には、情報の真偽を考えながら分析的に考える経験をして欲しかったからだ。事実と真実の違いは国語の教師に聞いたり辞書を調べたりした。授業の進め方を读まれて、教師による誘導と感じられた方もいると思う。この授業では、踏み込むと「うそ」「本当」など言葉の定義になり情報科の視点からずれてしまう感じがする。そこで目標に到達できるように強引な運びをしていることを否定しない。

#### 参考文献

- 1) サイモン・ウェルフェア他『アーサー・C・クラークのミステリー・ワールド』角川書店, 1986年
- 2) コリン・ウイルソン『超常現象の謎に挑む』教育社, 1992年